

インドの自然観

——特に仏教の——

インド人が自然をどう扱っていたかは時代によって異なる。イスラム以前でいうと、ごく大雑把に次のようにいえるだろう。

(一)バラモン教時代。人間は自然に畏敬の念を抱き、そこに大きな力を見、神を見、神に加護を祈った。証例。「汝らの車をして進みきたらしめよ、アシュウィン双神（「天地、日月、ないし金星」）よ、鷲にひかれて飛び、恵みゆたかに、助けに富む車をして。それは人間の思想よりも速く、三座を擁して風のごとく疾走す、牡牛なす双神よ。」（リグ・ヴェーダ）

(二)仏教時代。人間はもはや神を恐れず、神を問題とせず、自然に対する畏敬の念を失った。人間から独立した自然は人の関心外に去り、自然は人間の生存にとって意味を有する限り考察の対象になった。しかもその場合、自然は人間にとってマイナ斯的な働きを行なうものとして考えられた。証例。「世の中は泡沫のごと

定方 晟

しと見よ。世の中はかげろうのごとしと見よ。世の中をこのように観ずる人は、死王もかれを見ることがない。この世の中は暗黒である。ここではつきりと（ことわりを）見分ける人は少ない。網から脱れた鳥のように、天に至る人は少ない。」（法句經174）

(三)ヒンドウー教時代。自然を愛すべき対象、積極的に享受すべき対象と考えた。この態度は人が自己の力にめざめ、自然に対する畏れを去った結果と考えられる。つまり、自然はやさしい存在で、人が安心して愛することができたものになったのである。証例。「アヌスーヤーさま、この二本の木の睡みあいにはほんにうるわしうございます。ここにはナヴァマリーカーが新しい花もたわわに若さにあふれ、そこにはまたマンゴーの木が実をつけて、楽しみを待つばかりになっておりますほどに。」（シャクンタラー）

(一)の時代の特徴であった「自然への畏れ」が徐々に薄れていっ

たとき、(二)や(三)の時代が現われたのだが、両時代は相反する態度をとった。仏教は自然を否定し、ヒンドゥー教は自然を肯定したのである。私はこれら三つの自然観のうち、特に仏教時代の自然観をとりあげてみようと思う。なぜなら、これが世界の他の自然観に比べても、独自性をもつと思われるからである。以下、人間対自然(主体対客体)に視点を置いて述べる。

仏教の五蘊の教義によると、人間は五つの要素、すなわち色、受、想、行、識から成る。このうち色だけが物質的要素で、他の四つは精神的要素である。

五蘊はここでは人間の構成要素だけをのべたもののようにみえるが、五蘊が十二処や十八界の教義と関係づけられるときには、五蘊は人間と自然の両方を含めた全宇宙の構成要素をのべたものであることがわかる。すなわち、十二処説によると、存在を構成するものに、まず主体の側の要素として、眼、耳、鼻、舌、身、意があり、客体の側の要素として、色、声、香、味、触、法がある。そして、五蘊のうちの色は、十二処のうちの意と法を除く他の全てに対応する。つまり、五蘊の色は色声香味触という客体の世界(五感の対象)をもカバーしているのである。

十八界説は十二処説に六識(眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識)を加えたものである。五蘊のうちの色は、ここでも、十二処の場合と同じ十のカテゴリーに対応する。

五蘊や十八界の教義から知られることは、仏教では存在のうち

自然に与えられる位置が低いことである。後世の七十五法や百法の教義では数がふえるのは自然以外の部分においてであるから、自然の占める位置は相対的にますます低くなる。

五蘊の教義が人間の構成要素だけをいったものとすれば、この教義においては自然は人の関心外におかれているということすらできる。また、五蘊の教義が宇宙全存在についていったものとするれば、自然は人間の肉体と分離されていない(色が両方をカバーするから)ということができる。現代人の考えでは自然と人間の境界をなすものは人間の皮膚であるが、五蘊説では肉体は自然とつながっている。それならば、どこから内が人間かというと、周知のように、そもそも仏教は自我なるものの存在を否定する。だから、自然と人間の境界線を探そうとするわれわれの試みは無意味といえるであらう。

無我は仏教の根本的な教義である。「我」とは「永遠不変の本体」といったような意味をあらわし、仏教はそのようなもの、いわゆる自我、ないし魂といったものを否定する。初期の仏教徒はこの「我」を人間についてだけ考える傾向があった。だから、五蘊説や十二処説などにおいても、我はこれらの要素の一時的な集まりにすぎないといって、自我の存在を否定することには熱心であった。しかし、その一方で、要素を實體視してしまう結果に陥った。

「我」の否定が人間についてだけでなく、人間も自然も含めて、

すべての存在について言わねばべきであることを主張したのは大乘仏教徒である。その一人ナーガールジュナは「我」*atman*という言葉の代りに「自性」*svabhava*という言葉を使った。「我」がややもすれば、人間についてだけの本体をいうという誤解を生む欠点をもっていたのに対し、「自性」という言葉は人間と自然を含めたすべての存在について本体が問われているのだということを明確にした。

この二つの立場の相違は「我空法有」および「人法二空」という言葉によって示される。初期仏教徒の立場は「我空法有」、すなわち人間の自我は存在しないが、自然的要素は存在するという立場である。大乘仏教徒の立場は「人法二空」、すなわち人間の本体も、自然の本体も、ともに存在しないという立場である。(私はいま法という言葉は自然という言葉におきかえたが、これには問題がある。自然は法の一部ではないからである。しかし、ここでは大まかに、人―法の対立を人間―自然の対立におきかえておく。なお、質疑応答においては、現代の自然の概念を表わすサンスクリット語を見出すのが困難であることを述べておいた。) ナーガールジュナは「人法二空」の立場から鋭い論理で本体の概念を攻撃した。かれはまず言葉(＝概念)の欺瞞的な性格について人の注意を喚起する。人は言葉によっていかに迷わされているか、そしていかにそのことに気づかないでいるか、を示してみせる。

言葉あるいは名前というものは、ある一定の条件のもとに存在する事物に仮に名づけられたもののなのに、その条件が失われて、その事物がすでに意味を失っても、名前だけが一人歩きします。そして、人はその名前を通じて、事物が名前同様、永遠不変に存在するかのようになりこんでしまう。

ナーガールジュナは「行くものは行かず」という議論によって、いかなる存在にも本体(自性)が存在しないことをわれわれに納得させようとする。いまこの議論を私なりに敷衍してのべてみよう。われわれは日常たとえば次のような一連の表現を行なっている。

太郎は行く。

太郎はこるぶ。

太郎は笑う。

太郎は泣く。

.....

われわれは右の数々の表現から「太郎」という不変の存在を抽出して行く。太郎はつねに、行く太郎か、こるぶ太郎か、笑う太郎か、泣く太郎か、.....する太郎か、いずれかの太郎であるはずなのに、どの動作とも無関係の太郎を抽出して行く。そのような抽象的な太郎は決して存在しない。それにもかかわらず、われわれはあたかもそのような太郎が存在するかのごとくに思いこんでいる。

また次のような一連の表現を考えてみる。

太郎は行く。

花子は行く。

犬が行く。

電車が行く。

.....

われわれは右の数々の表現の中から「行く」という普遍的な動作を抽出してくる。「行く」という動作そのものは決してない。つねに何ものかが行くのである。それにもかかわらず、われわれは暗黙のうちに「行く」という動作それ自身が存在するかのよう
に思いこんでいる。

そして日常の現象をこう解釈している。一方に種々の実体がある。一方に種々の動作がある。そして任意の実体が任意の動作を選びとっていくのだ、と。こうして「AがBする」という日常的言説を通じて、本体の概念がわれわれの頭に深くしみつくのである。

ナーガールジュナの「不生不滅」という言葉も本体の概念を否定するものとして解釈さるべきである。仏教哲学以外で「不生不滅」という言葉を使うときは、多くのものは無常であるが、これだけ、たとえば神とかイデアとかは不生不滅である、ということの意味する。仏教の「不生不滅」は一部のものの在り方をではなく、存在すべての在り方を示している。これを言いかえれば、わ

れわれは何か目前の現象の変化の奥に目をこらして不変なものを見るよう努力する必要はない、ということである。変化をありのままに見ればよいので、そこに妄想（主体という妄想）を働かせなければよいのである。

以上のように、仏教は存在の考察を通じて人間と自然を同次元でとり扱ったため、人間と自然を異なるもの、対立するものとする意識を生みにくかった。人間も自然も実体をもたないから、両者のあいだには緊張も生じない。人間はほとんど自然の存在に気づかぬかのように生きることになる。

しかも、これらの考察を仏教徒は瞑想の伝統のうちで、すなわち目をして行なった。観察という言葉はもともと仏教用語であるが、かれらはそれすら目をして行なった。かれらの観察には自然の多様性は全く無縁であった。ギリシャではアリストテレスの『動物誌』のように自然に対する旺盛な好奇心を示す著作が生まれたが、インドにはそのようなものはいかに生まれなかった。

このように、仏教徒が自然（外界）に対してとる態度は「無関心」であったが、関心をもつ場合には、それに対して否定的な態度をとった。つまり、自然は苦に満ちたものであり、煩惱の巣である。仏教徒はこのような自然からできるだけ遠ざかり、心を動かさぬことを理想とした。經典の「賢者は森の生活を楽しむ」（法句經99參照）という文句も決して仏教徒の自然愛を示すものではなく、むしろ外界の刺激からできるだけ遠ざかることを意味す

るものであった。こうして、仏教徒における自然は文学や科学を生み出す力となることから縁とおく、哲学的考察のうちに抽象化されたものとなった。

(さだかた・あきり、インド思想史、東海大学教授)